歴史を歩く㉒

『戦国時代の群像 ～第七話　肝付兼続の出現』

天文6年（1537年）、志布志城において行われた会合の席に、若い武将がいた。肝付家第十六代当主　肝付兼続（きもつきかねつぐ）である。

兼続は永正8年（1511年）に肝付兼興（きもつきかねおき）の長男として生まれた。天文2年（1533年）に父兼興が死去すると、叔父の肝付兼執と家督を廻って対立。兼執を滅ぼし、当主の座に就いた。二十二歳の時である。

志布志城での会合における、日隅地域（日向諸県地域・大隅地域）の諸豪族の連合による薩州島津家当主の島津実久（しまづさねひさ）派一大勢力の構築は、志布志城主の新納氏（にいろし）の反対によって実らず、そのため新納氏は周囲の豪族の攻撃によって没落する結果を招いた。

肝付兼続もこの時、新納氏の粛清に加担したわけであり、すなわち島津忠良（しまづただよし）、貴久（たかひさ）親子と対立していた島津実久を支持する立場であった。

しかしながら、この兼続が島津実久を支持したことについては、かなり不可解な点がある。

そのまず一点目は、飫肥と櫛間を領していた豊州島津氏と肝付氏の関係である。肝付兼続の父兼興と、櫛間城主 島津忠朝（しまづただとも）は永正17年（1520年）以降、対立を深め、争いを起こしている。志布志城での会合の時、肝付家にとって、島津忠朝は事実上敵方の立場にある。ただし、兼続の母は島津忠朝の姪でもある。

二点目は、志布志城主 新納氏と肝付氏の関係である。かつて、島津本家第十一代当主である島津忠昌を自殺にまで追いやった新納氏と肝付氏は40年以上、凡そ3代に亘って共に連携し、島津忠朝と対抗してきた間柄である。

三点目は、島津忠良・貴久親子と肝付兼続の関係である。兼続の正室阿南（おなみ）は、実は島津忠良の娘であり、貴久の姉である。肝付家と島津家の関係を重視した政略結婚であると言われているが、結婚したのは、兼続が十七歳の時と言われているので、1528年頃ということになる。この頃は、島津貴久が島津実久によって、守護職を追われ、再起を図ろうとしていた時期である。

さて、以上の3つのことを踏まえて、もう一度志布志城会合を振り返ると、肝付兼続が、祖父の代から共に協力し合ってきた新納氏ではなく、むしろ敵対してきた島津忠朝と組むことも、島津忠良・貴久ではなく、島津実久を支持したことも、理解しかねるところである。島津忠良・貴久方に付くのが筋ではないかと考えてしまう。

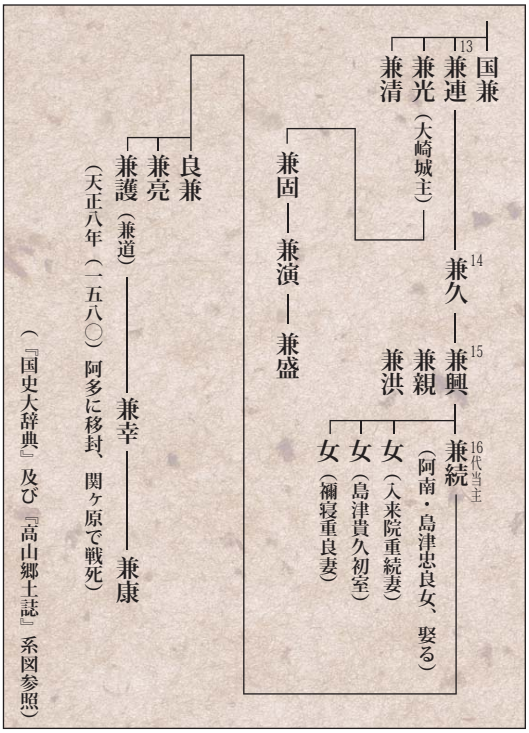
このことについて、筆者としてはどうしても納得できなくて、とりあえず周辺にある文献や資料などを、時間の合間に調べているのであるが、未だこのことに関して、何らかのヒントすら見出せずにいる。このことで二ヶ月間、執筆が止まってしまった。

さらに兼続は新納氏降伏後も不可解な行動を重ねる。

新納氏の領土は、島津忠朝、都城領主　北郷忠相（ほんごうただまさ）、肝付兼続で三分割され、救仁郷の地は肝付兼続の領土となった。しかし、『西藩野史』には、天文8年（1539年）3月29日に大崎が貴久の所領となった旨が書かれている。3月29日は志布志城包囲攻撃の前となるので、時期的に新納領分割以前となる。文献資料には時期の差異が生じることはしばしばなので、今回はあえて時機の違いには深く触れないが、いずれにせよ、肝付兼続の領地になったのか、あるいは兼続の領地になる予定の大崎の地が、この頃、島津貴久の所領として記録されている。そして、このことを裏付けるように、間もなく肝付兼続は、島津忠良・貴久を支持する動きを見せるようになり、新納氏と同様、周囲の豪族と対立することとなる。

このように歴史の舞台に出現した若き武将 肝付兼続は、この後に大隅半島を舞台に、壮絶なドラマを展開していくことになる。

（大崎町教育委員会 内村憲和）



▲肝付氏の家系図